

# かんい けんたくほう お薬をチューブから投与する方法(簡易懸濁法)

## かんいけんたくほう 【簡易懸濁法とは?】

お薬(錠剤やカプセルなど)をつぶさずに、そのまま55℃程度のお湯に入れて

けんたく  
懸濁したものをチューブから注入する方法です。

### ! 「けんたく」って何?

液体の中にお薬の粒が散らばった状態のことです。

お薬の粒が完全に溶けていなくても、そのまま投与することができます。

メリットとして、

- 投与する直前までお薬の確認ができて安全
- お薬が中止・変更になった時にも対応しやすい
- つぶさないなのでお薬の品質が保たれる

などが挙げられます。

## 【準備するもの】



お薬



お湯(55℃程度)



けんたく  
懸濁ボトル

または



注入器とカップ

お薬をけんたく・注入する容器

### ! 約55℃のお湯の作り方

以下のどちらの方法でも55℃前後のお湯が作れます。

- ① 水と熱湯(90℃程度でよい)を1:2の割合で混ぜる
- ② 60℃設定のポットの湯を使用  
→数分で冷めて55℃前後になります。



かんいけんだくほう  
【簡易懸濁法の手順①】

1 お薬を確認して けんたく懸濁ボトルへ入れる

☆後から混合する必要があるお薬はよけておく



2 けんたく懸濁ボトルに約 55℃のぬるま湯を入れ  
キャップをしてよく混ぜる



↓ 10分程度放置

3 よけておいたお薬を加えて 再度混ぜる

4 けんたく懸濁ボトルの注入口をチューブへ接続し  
ボトルを軽く押しながらかお薬の混ざった液を流す



5 けんたく懸濁ボトルへ 20ml 程度のぬるま湯を入れて流す  
(チューブやボトル内に残ったお薬を流す)

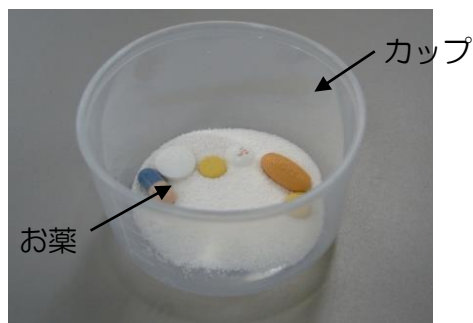


6 けんたく懸濁ボトルを洗浄する

かんいけんだくほう  
【簡易懸濁法の手順②】

1 お薬を確認して カップへ入れる

☆後から混合する必要があるお薬はよけておく



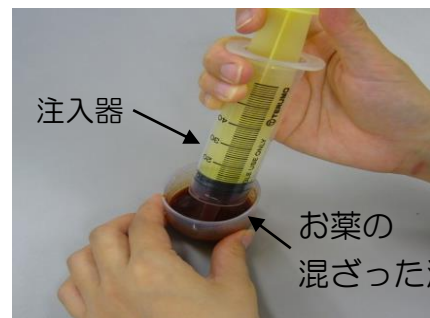
2 約 55℃のぬるま湯を入れて よく混ぜる



👍 10 分程度放置

3 よけておいたお薬を加えて 再度混ぜる

4 注入器でお薬の混ざった液を吸い取る



5 注入器をチューブへ接続してお薬の液を流す



6 注入器へ 20ml 程度のぬるま湯を入れて流す  
(チューブや注入器内に残ったお薬を流す)



7 注入器とカップを洗浄する



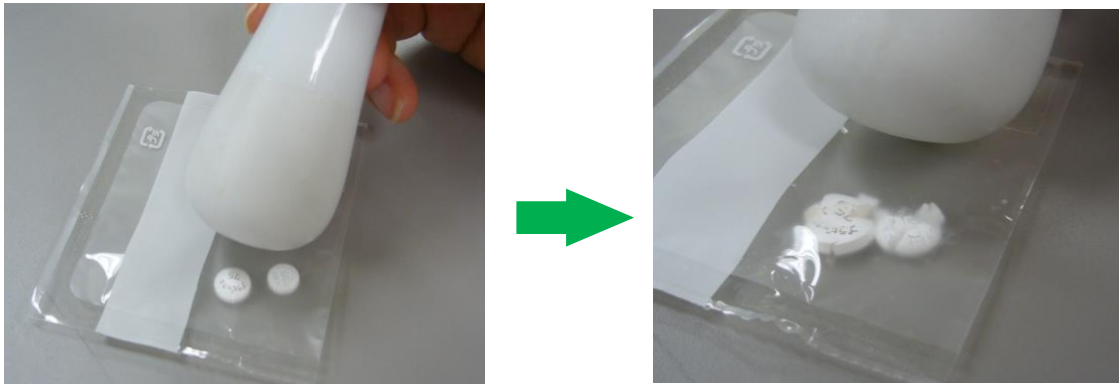
けんたく  
【懸濁時に注意が必要なお薬】

□に✓のついたものが、現在あなたが使用しているお薬についての注意事項です。

□ そのままでは懸濁できないお薬

例：プラビックス錠、アマンタジン塩酸塩錠 など

（該当するお薬：



コーティングなどによりそのままでは懸濁しにくい錠剤は、PTPシートや分包紙に入った状態で、すりこぎやスプーン、クラッシャーなどを使って直前に軽く砕いてから懸濁します。

□ 他のお薬が懸濁しにくくなるお薬

例：塩化ナトリウム

（該当するお薬：

塩化ナトリウムは、一緒に混ぜることで他のお薬が懸濁しにくくなる場合があります。

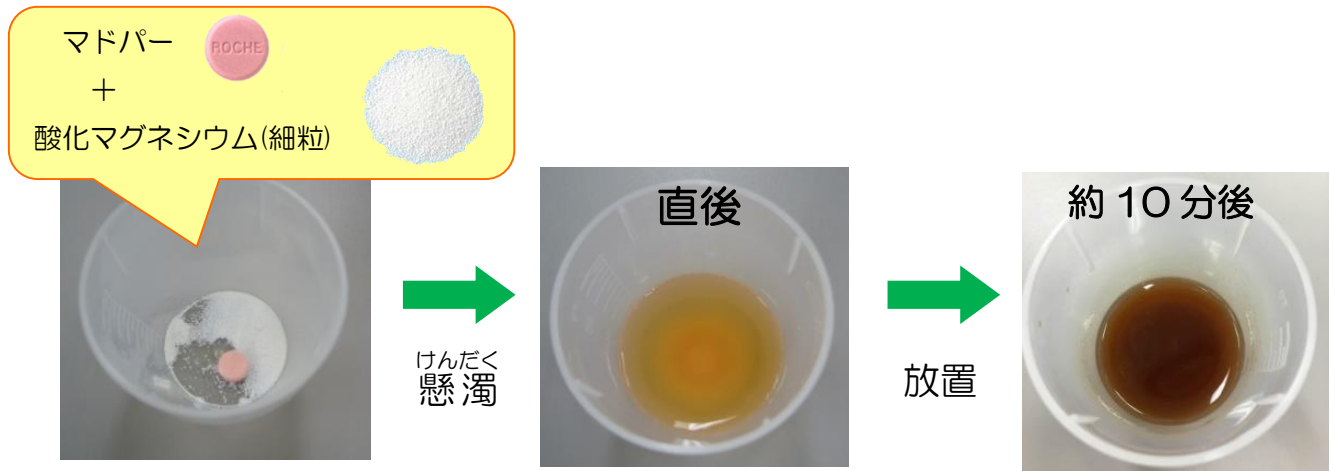
そのため、他のお薬を懸濁し終わった後で容器に加えて懸濁します。

□ 一緒に懸濁<sup>けんたく</sup>すると配合変化を起こすお薬

例：レボドパ製剤(マドパー・ドパコールなど) + 酸化マグネシウム製剤

レボドパ製剤 + 鉄剤

(該当するお薬： )



例えば、マドパーと酸化マグネシウムと一緒に懸濁<sup>けんたく</sup>した場合、懸濁液<sup>けんたく</sup>は褐色～黒色に変化し、マドパーの効き目が徐々に低下するとされています。そのため、これらのお薬が同時に処方されている場合は、別々に懸濁<sup>けんたく</sup>するなどの工夫が必要です。

□ 高温でとろみがつくお薬

例：エンテロノンR

(該当するお薬： )

エンテロノンRは、懸濁<sup>けんたく</sup>するときの温度が高すぎるととろみが付いてしまい、チューブが詰まる原因になる可能性があります。55℃前後のお湯であれば問題ないため、懸濁<sup>けんたく</sup>温度がそれ以上に高くないように注意しましょう。

## □ 特殊な設計がされているお薬

例：ランソプラゾール OD 錠、エبرانチルカプセル

(該当するお薬：

)



(腸で溶け出すタイプ)



(ゆっくり溶け出すタイプ)

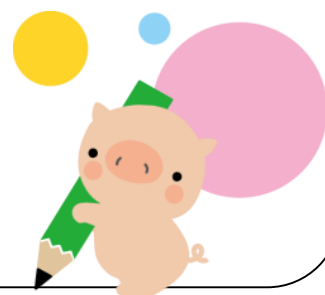
これらのお薬には、錠剤・カプセル内に、腸で溶け出す（腸溶）、あるいはゆっくり溶け出す（徐放）などの特殊な構造を持った細かい粒が組み込まれています。これらの粒は、懸濁した際に溶けずにそのまま残りますが、それをつぶしてしまうと、お薬が効きすぎてしまって副作用の発現につながったり、逆に薬の十分な効き目が得られなかったりする可能性があります。つぶさずにそのまま注入してください。

## 【その他の注意事項】

- ★粉薬や液体のお薬がある場合、量が多いとお湯の温度が低下してしまい、他のお薬が懸濁しにくくなってしまう場合があります。このような場合には、粉薬や液体のお薬は別に懸濁する、あるいは他のお薬を懸濁した後に混ぜるなどの工夫が必要です。
- ★10分程度懸濁した後のカプセルの溶け残りが気になるようであれば、注入前に取り除いても構いません（有効成分が溶け出していれば問題ありません）。
- ★懸濁の際に硬水（外国産のミネラルウォーター）やアルカリイオン水を用いると、薬の吸収・効果が落ちてしまう場合があります。水道水を用いるようにしてください。
- ★懸濁ボトルやカテーテルチップは、破損・劣化した場合は新しいものに交換してください。
- ★懸濁に使用する容器の洗浄は、日常的には水洗いか食器用洗剤で行ってください。週に1回程度、漂白剤でつけおきしていただくとよいかと思います。
- ★お薬の中にはチューブからの投与に適さないものもあります。お薬を使用になる際には、ご自身で判断されず、必ず医師や薬剤師に相談するようにしてください。



【メモ】



かんいけんたくほう  
簡易懸濁法に関して不都合なことやわからないこと

その他お薬に関するご質問がございましたら

当院薬剤師までお気軽にご相談ください



独立行政法人 国立病院機構  
**東名古屋病院**  
NATIONAL HOSPITAL ORGANIZATION  
HIGASHI NAGOYA NATIONAL HOSPITAL

〒465-8620 名古屋市名東区梅森坂 5-101

TEL : 052-801-1151 (代表)

2016年6月 薬剤部作成